

2026年(令和8年)8月20日(木曜日)



AI時代に輝く、

生産機械技術科の「現場力」

近年、AIをはじめとする技術の進化に伴い、高校生の進路選択や将来の雇用環境に対する関心が高まっています。「AI台頭で若者の雇用に悪影響が出ているのでは」

というニュースや不安の声を耳にすることも増えました。実際に、米国では近年多くの労働者が影響を受け、会計士などの事務職から配管工などの技能職へ転身する動きも見られます。日本でも経済産業省・厚生労働省がまとめた『ものづくり白書』のデータによると、2040年には事務職が440万人余剰となる一方、現場を支える技能職は260万人不足すると推計されるなど、労働市場に大きな変化が訪れています。

こうした変化の背景には、「画面上のデータ処理」と「実際の現場でモノを扱う作業」の違いがあると言われています。AIはデータ処理や文章作成を得意としますが、現実の素材に触れ、試行錯誤しながら機械を組み立て、不

具合を解決することなどは得意ではありません。どれほど高度なAIや自動化機器が導入されても、それらを物理的に現場に設置し、プログラムを繋ぎ、微調整やメンテナンス(保全)をする「人間の技術者」がいなければ、十分に活かすことはできないのです。「生産機械技術科」で得られるのは、まさにこうした現場の課題を自らの技術で解決する力です。単なる作業員としてではなく、現場の課題を解決できるよう、CAD(製図ツール)で形を考える「設計」、素材を精度高く削り出す「加工」、機器を動かす不具合を防ぐ「制御」という現場の基幹技術(設計・加工・制御)を2年間で体系的に学びます。『ものづくり白書』で示される「現場の基幹技術を理解

した上でデジタル技術を活用できる人材」の育成こそが、当科の学びそのものです。高度な機械やAIを現場で使いこなす側になるための確かな土台がここにあります。大館をはじめとする北鹿地域には、鋼構造物や金属・資源関連、設備保全などの重厚な「ものづくり」の基盤があります。当科の修了生たちは、現場の第一線で実績を重ね、現在では現場リーダーや管理職として組織の中枢を担い、幅広く活躍しています。設計・加工・制御というもののづくりの全容を理解して身につけた総合的な視点は、現場での作業のみならず、将来的にキャリアを切り拓く上でも大きな強みとなっています。地域産業の頼もしい力として現場や組織を支えている

修了生たちの姿を見るにつめくたい。8月23日(日)は、この地に根ざした技術者のオープンキャンパス、なら教育の重要性を改めて実感し、9月26日(土)の学園祭(さんぷうフェス)では、学生たちの実習成果やキャンパスの雰囲気を感じてほしいと思います。皆さまのご来校を心よりお待ちしております。

横山 雅紀



生産機械技術科のオープンキャンパスの様子